ル・コルビュジェの「装備」における標準棚の実践

「壁」の変容

REALIZATION OF THE STANDARD CABINET AS THE “EQUIPMENT” BY LE CORBUSIER:

Transformation of the “Wall”

千代 章一郎^{*1}

Shoichiro SENDAI

This paper aims to clarify the spatial composition of the standard cabinets as the “equipment” by Le Corbusier (1887-1965), in order to discuss the notion of the “decor” in the 20th century. In the private house projects, he set to study the standard cabinet as partition separated from the wall. However, he also examined the incorporated cabinets into the wall at the same time. The realization of the standard cabinets by Le Corbusier expanded to the both poles for a new notion of “wall” while continuing to the methodology of the decorative arts.

Keywords : *Le Corbusier, Equipment, Standard cabinet, Wall, Mobility*

ル・コルビュジェ, 装備, 標準棚, 壁, 可動性

1 はじめに

本稿は、室内空間の「装飾 décor」という古典的な建築論の主題の20世紀の転回について論じるために^{注1)}、ル・コルビュジェ(1887～1965)の住宅作品における室内空間の「装備 équipement」、なかでも、その標準棚の制作手法について明らかにする。

前稿において、ル・コルビュジェの全著作の言説から、「装飾芸術」の「家具 meuble」に対する対案として提案された「装備」の概念の生成過程を分析し、ル・コルビュジェにおける「装備」の主題が経年的に拡がりを見せ、建築物に付随する家具の問題から自然環境制御する「壁」の問題にまで至っていることを明らかにした^{注2)}。しかしながら、言説はあくまで理念的であり、具体的な住宅建設における「装備」の方法論について必ずしも明快に説明しているわけではない。一方で、ル・コルビュジェは経年的に住宅作品を構想しているが^{注3)}、その多くが室内「装備」の詳細に至るまで丹念に検討され、変更を伴っていることは、残された建築図面が示している。量産住宅の研究などによる理論的普遍解を個人住宅の特殊解へと変換するだけであれば、ある程度の調整を伴うにしても自動的な制作過程になったはずである。しかしそうでないとなれば、ル・コルビュジェによる室内空間の「装備」は確立された方法論の機械的適用ではなく、経年的に発展もしくは変化していくと推測される。

さて、ル・コルビュジェの「装備」の主題は、棚・机・椅子から拡がっていくが、なかでもル・コルビュジェ自身が何より言及し、

検討を加えた要素が棚、すなわち規格化した寸法によって大量生産して様々な組み合わせが可能な「標準棚」である^{注4)}。そこで本稿では、まずル・コルビュジェが建設事業の実践の文脈で棚について言及している言説を抽出して、棚を空間として実現するための方法論を導き出す^{注5)}(2章)。そしてそのル・コルビュジェ独自の方法論を実践手法として類型化し、ル・コルビュジェの全住宅作品の建築図面に依拠して棚が検討されている事例を抽出する^{注6)}(3章)。その上で、用いられている手法の変遷を明らかにする(4章)。最後に、それらの変遷の理由やそれが持つ意味について考察する(5章)。

既往研究においては、ル・コルビュジェの住宅作品における家具の問題は付随的次項と見なされるか、もしくは家具(とりわけ椅子や机、あるいは照明)そのものに評価を与えるものに二分される。いずれも躯体/家具の二元論を前提としているために、内部空間の構成要素としての「装備」の実践的内容の分析については十分な研究が行われていない^{注7)}。一方本稿においては、棚という可動・不動にもなり得る要素に着目し、20世紀における建築史の主題に空間論としての新しい知見を得ようとするものである。

2 「棚」の方法論：壁との関係性

ル・コルビュジェが「装備」の理念について、直接的間接的に語っている言説は、1920年から晩年まで経年的に認められるが、作品事例に沿って具体的に「装備」の実践手法を解説している事例は、そ

^{*1} 広島大学大学院工学研究科 准教授・博士(工学)

Assoc. Prof., Graduate school of Engineering, Hiroshima Univ., Dr.Eng.

れほど多くない。

該当する最初の言説は、レスプリ・ヌーヴォー館（1925）に関する言及である。レスプリ・ヌーヴォー館（1925）は「装備」という概念を明確にして例証したはじめての作品であるが、しかしその設置の手法に関しては、棚についてごく簡単に触れているに過ぎない。

「大量生産で製造され、数多くの組み合わせにしたがって並置することのできるこれらの標準棚はバザール・ド・オテル＝ド＝ヴィル[百貨店]やシャンゼリゼ大通りで販売されることになるが、その棚は部屋の壁沿いに目一杯積みあげることも、壁となることもできる。」^{注8)}

ル・コルビュジエによれば、様式的な棚に代わる標準棚の数は用途に応じて様々な組み合わせが可能であり、空間の無駄を無くすように設置される。したがって、棚はどのようにも動かすことができ、原則的に設置の手法は無限であるはずである。「壁に沿って contre the mur」設置することは、前近代的な「装飾芸術」の「家具」でも用いられたもともと一般的な手法であるが、レスプリ・ヌーヴォー館（1925）において例証されるように、標準棚は脚によって空中に浮かすこともできる。

さらに、床から天井まで覆ってしまうこともできる。しかし、レスプリ・ヌーヴォー館（1925）には、天井に到達する棚は展示されていない。『近代建築名鑑』（1926）に掲載された内観写真もすべて、棚による部屋の分離を例示しているものの、完全に閉じてはいない（Fig.1）。そもそも、「壁沿いに目一杯積みあげること」と「壁となる constituer le mur」の言説上の区別も曖昧である

Fig.1 Cabinets of the Pavillon L'Esprit Nouveau (1925) ^{注9)}

天井にまで到達する棚が展示されるのは、1929年のサロン・ドートンヌのときである。アパルトマンの一室を想定して、シャルロット・ペリアンとの協働によって鋼管製の「棚」、「机」、「椅子」を展示することが主目的であるが、その室内空間に設置された棚について、ル・コルビュジエは『プレジジョン』（1930）において解説している。

「棚を室内の壁沿いに置く人もあるでしょうし、棚を使って天井までの、あるいは中間の高さの間仕切り壁とする人もあるでしょう（1925年のレスプリ・ヌーヴォー館を参照）、またこの棚を組み込んだ石積みの壁を造る人もあるでしょう。」^{注10)}

棚の設置の手法は、レスプリ・ヌーヴォー館（1925）よりも細分化されている。棚は「壁に沿って」置くだけではない。壁からは自立して「間仕切り壁となる constituer des cloisons」こともできる。さらに、構造的に建物を支える壁に棚を組み込んで「壁となる」こと

もできる。

こうしてル・コルビュジエは、サロン・ドートンヌ（1929）に関する言説において、棚を配置する3つの手法を確立する。すなわち、壁に「組み込むこと incorporer」、「寄せること（沿わせること） appuyer」、そして壁から離して「置くこと disposer」である^{注11)}。

しかしながら、サロン・ドートンヌ（1929）における棚の空間構成は、この3つの手法をすべて例証しているわけではない。たしかに、レスプリ・ヌーヴォー館（1925）同様に、棚が空間を分節する間仕切り壁として機能している。さらに、レスプリ・ヌーヴォー館（1925）では実現されなかった天井まで到達する棚が、台所の手前と奥の壁に沿って設置されている。しかし、壁に組み込まれた不動の棚はない。天井まで到達する棚は、あくまで壁のように見えるだけである（Fig.2）。

Fig.2 Sketch of the Interior of Le Salon d'Automne (1929) by Charlotte Perriand (left) and its Cabinets (right) ^{注12)}

棚の設置手法に関する理論と実践の不整合は、展示空間だけではなく、実作品の住宅についても当てはまる。ル・コルビュジエは『プレジジョン』（1930）において、「豪華な邸宅の扉付き大書棚」を例に出し、棚を壁に「組み込むこと」について説明している（Fig.3）。

Fig.3 Sketch of the incorporated cabinets (left) and the interior of Villa Church (1929) (right) by Le Corbusier ^{注13)}

「場合によっては棚を壁とすることによって家具を減らすことは、鉄筋セメントの初歩的手段によって可能です。

一つの層の床と天井を描いてみましょう。そしてその高さをたとえば四つに分けます。これは鉄筋コンクリートの横板で、厚みは数センチ、そして壁から壁へ渡っている、あるいは途中まででもよい。このコンクリート板のあちら側やこちら側に、必要に応じて壁塗をします。・・・これですばらしい棚＝内壁が完成しました。ここに先ほどお話しした「内部装備」をはめ込めばよいのです（106）。」^{注14)}

ル・コルビュジエが『プレジジョン』で説明する図106はモスクワの軽工業省チェントロソユーズ（1929）の装備であり、図107の

「豪華な邸宅」の具体名は明言されていないが、ヴィラ・チャーチ（1929）のことと思われる。ル・コルビュジエによれば、それは「壁mur」として、内部空間から見れば内壁「paroi」を構成する^{注15)}。

しかし実際のヴィラ・チャーチ（1929）の建設では、不動かどうかは別にして、サロン・ドートンヌ（1929）の展示と同様、壁に「寄せること appuyer」によって棚が天井まで達して置かれている。両者の違いは、ヴィラ・チャーチ（1929）の場合、両側壁にまで棚が到達し、「組み込むこと」の視覚的表現がより説得力のあるものになっていることである^{注16)}。

こうしてル・コルビュジエは、『プレジジョン』において図 98 と図 99 を用いてヴィラ・チャーチ（1929）の実践的知を活用し、次のように言うことができた（Fig. 4）。

Fig.4 Sketch of plans and the sections of a conventional house and a modern house by Le Corbusier ^{注17)}

「新しい時代の平面図と断面図を描いてみましょう。窓と間仕切り壁と棚。随分と場所の節約です。室内をゆっくりと動き回れます。動作は迅速、正確。整理もまるで自動的なほど思いのまま。毎日、相当な時間の節約です。この時間は貴重です(99)。」^{注18)}

『プレジジョン』の図 98 の組積造住宅に対する図 99 の鉄筋コンクリート住宅の対置はル・コルビュジエの常套手段であるが、柱とスラブによる鉄筋コンクリート住宅の場合、そもそも耐力壁がなく、棚を壁に組み込むことはできないはずである。それでも「水平横長窓」の下に設置された棚^{注19)}は、腰壁に沿って置かれているにもかかわらず、ル・コルビュジエの論理にしたがえば、横板を渡せば「組み込むこと」に相当する。一方、窓側と反対の棚は、壁とは離れているために、厳密に言えば間仕切り壁であり、「壁のように」見えるにもかかわらず、壁からは離して「置くこと」に相当すると考えることもできる。いずれにしても、棚を「組み込むこと」「寄せること」「置くこと」の境界は、「壁」への意識の在り方、設置のディテールなどによって大きく異なってくる。

そして以後の著作において、ル・コルビュジエが棚の空間配置の方法論について主題的に言及することはない。

3 「棚」の実践における類型

ル・コルビュジエによる棚の空間構成についての実践的言説から、その方法論は、「壁mur」ととの関係において次のように整理することができる。

・棚（dis）：壁から離して「置くことdisposer」：空中に浮かせた棚や天井に達しない棚（dis-1）、天井に達する棚（dis-2）などがあ

る。室内空間を隔離する間仕切り壁cloisonとしての機能を持つが、壁murからは自立している。

・棚（app）：壁に「寄せることappuyer」：空中に浮かせた棚や天井に達しない棚、天井に達する棚などがある（両側壁とは接しない）。室内空間を隔離する機能を持つが、壁murと一部接している。前近代的な「装飾芸術」における「家具」と配置という点では共通している^{注20)}

・棚（in）：壁に「組み込むことincorporer」：理論的には壁murと一体化し内部空間の内壁paroisとすることであるが(in-p)、側壁と天井にまで達する外棚を壁に寄せることで、「壁のように」見せることもできる(in-a)。

以上の3類型の定義に基づいて、ル・コルビュジエの全住宅の構想を分析すると、次のような変遷の過程が得られる（Table 1）。

Table 1 Projects of private house and its cabinets by Le Corbusier^{注21)}

date	Name of the private house projects conceived in Foundation Le Corbusier	cabinet (in)	cabinet (app)	cabinet (dis)
1905	Villa Fallet		*	
1907	Villa Stotzer			
1907	Villa Jacquemet			
1912	Villa Favre - Jacot			
1912	Villa Jeanneret-Perret		*	
1916	Villa au bord de la mer (Villa Paul Poiret)		*	*
1916	Villa Schwob		**	
1917	Maison ouvrière		*	
1920	Maison "Citrohan"	*		*
1921	Aménagement de la villa Berque		**	
1922	Maison d'artiste			*
1922	Villa Besnus		**	**
1922	Maison-Atelier du peintre Ozenfant	**		**
1923	Maison Ribot		*	*
1923	Maison de week-end, Rambouillet		*	**
1923	Maisons La Roche-Jeanneret	**	**	**
1923	Villa "Le Lac" (Petite villa au bord du Lac Léman)	**	**	**
1923	Maisons Lipchitz-Miestchaninoff	**	**	**
1923	Maison TERNISIER	**	**	**
1924	Lotissement de Lège		*	
1924	Maison Canale		**	**
1924	Maison Casa Fuerte	**	**	**
1924	Maison du Tonkin		**	**
1924	Pavillon de l'Esprit Nouveau		**	**
1924	Villa Planeix		**	**
1924	Galerie-Appartement Paul Guillaume		*	
1924	Villa Marcel		*	
1925	Villa - près de Bordeaux	*	*	*
1925	Villa Meyer	*	**	**
1925	Villa Mongermon		**	**
1926	Maison Cumenge			
1926	Villa Cook		**	**
1926	Maison Guiette		**	**
1926	Maison "Minimum"	**	**	**
1926	Villa Joseph et Hanau			
1926	Villa Princesse de Polignac			
1926	Maison Atelier Dutheil			
1926	Villa Stein-de Monzie "Les terrasses"			**
1927	Deux maisons du Weissenhof à Stuttgart			**
1927	Villa Church	**		**
1928	Villa Baizeau		**	**
1928	Villa Ocampo		**	**
1928	Villa Savoye "Les Heures Claires"		**	**
1929	Appartement de M. Charles de Beistegui	**		**
1929	Maison J. Canuel		**	**
1929	Maisons Loucheur			**
1929	Ma Maison, Régence-Atelier Le Corbusier			
1929	Villa Jacquin	**	**	**
1929	Villa Mme H. de Mandrot		**	**
1929	Villa Paul Prado			
1929	Un équipement intérieur d'une habitation (Salon d'autonne)	**	**	**
1930	Maison Errazuriz		**	**
1930	Villa Goldenberg			
1930	Villa Harris			
1930	Villa Martinez de Hoz			**
1931	Immeuble Porte Molitor - Rue Nungesser & Coli			**
1933	Petite maison, CMA			
1934	Maison de week-end (Henfel)	**	**	
1934	Villa Heng			
1935	Villa "Le Sextant", Les Mathes		**	**
1936	Voiture "Minimum"			
1937	Maison de week-end Jaoul			
1938	Maisons montées à sec : G.M. MAS			
1939	Maisons montées à sec : MAS [Maison Clark Arundell]		**	
1949	Villa du Docteur Curutchet			**
1950	Maison du Professeur Fueter	**		**
1951	Maison du gardien, Ronchamp	**	**	
1951	Maisons Jaoul	**	**	**
1951	Villa de Mrs Manorama Sarabhai	**		
1951	Maison pour Mr. Chinubhai Chimanbhai			**
1951	Villa (Hutheesing) Shodhan	**		**
1951	Cabanon Le Corbusier			**
1961	Pavillon d'exposition ZHILC (Centre Le Corbusier)			**

N.B. prototype house italic ; ** modification; * simple adaptation

4 「装飾」の実践

4-1 「装飾芸術」の解体

ル・コルビュジエが「装備」という新しい概念を実践において示し始めるのは、パリにおいて本格的に建設事業を手がけるようになる前後のことである。

生まれ故郷のラ・ショー＝ド＝フォンにおける住宅建設・改修については、地元の名士・縁者・友人を顧客とし、様々な家具、壁紙、カーテンや絨毯、照明機器まで室内装飾全般を手がけている。家具についても、ルイ 16 世様式以降の様式家具を顧客の趣味に応じて買い付けている^{注22)}。雑誌『レスブリ・ヌーヴォー』においてはじめて本格的に論評されたヴィラ・シュウォブ(1916)についても^{注23)}、竣工後も室内装飾に携わっているが^{注24)}、鉄筋コンクリート造によって実現された吹き抜けを介した近代的な空間構成に対して、様式家具が壁に接して然るべき位置に置かれ、空間配置という観点から見れば前近代的な装飾芸術の形式^{注25)}を保持している^{注26)}。

Fig.5 Plan of the Villa Paul Poiret (1916) 注27)

その一方で、ル・コルビュジエは同時期、パリにおいて服飾家ポール・ポワレのための別荘ヴィラ・ポワレ(1916)を構想している(Fig.5)。ヴィラ・シュウォブ(1916)と同じく鉄筋コンクリート造であるが、ヴォールト屋根の架かる内部空間は、これまでの住宅構想と大きく異なっている。手描きの素描しか残されていないために詳細は不明であるが、食堂、書斎、仕事場、娯楽室などの諸室の空間を分節しているものは、間仕切り壁に加えて、反復可能な幾何学的箱の単位をつなげたような棚である^{注28)}。ル・コルビュジエは後に標準棚となるこのような棚の仕掛けを「軽い間仕切り cloisonnements légers」としていることから^{注29)}、棚は間仕切り壁と等価な仕掛けとして扱っていることが分かる。

構造躯体から独立し、壁から離して間仕切り壁のように空間を仕切る棚(dis-1)は、後に「シトロアン型住宅」(1920)や芸術家の住宅(1922)の量産住宅の研究にも適用されているが、個人住宅の構想においてもテルニジアン邸(1923)、ランブイエの週末住宅(1923)などにも部分的に適用されている^{注30)}。

Fig.6 Perspective drawing of the Villa Berque (1921) 注31)

ヴィラ・ポワレ(1916)以後、パリでの最初の実作の一つ、ヴィラ・ベルクの改修(1921)では、既存の構造躯体に建具や家具を取り付けている。従弟ピエール・ジャンヌレと協働をはじめたこの住宅の内部空間の棚は、ヴィラ・シュウォブ(1916)と同様、壁に寄せられた棚(app)に変わらないが、高さを抑えた棚が壁に接しながら壁に対して垂直に配置されて、空間をやわらかく分節している^{注32)}(Fig.6)。この手法は、レマン湖畔の両親の家(1923)をはじめ後の住宅においても多用されている。

Fig.7 Cross section of the library of the Atelier Ozenfant (1922) 注33)

さらに、芸術家のアトリエ住宅においては、異なる棚の配置構成も断片的には研究されている。画家アメデ・オザンファンのアトリエ住居(1922)や彫刻家ジャック・リブシツのヴィラ(1923)ではアトリエが付随し、製作用具や資料のための棚が必要となるが^{注34)}、ル・コルビュジエはアトリエや書斎を家具のないがらんとするために、備え付けの棚を壁に寄せて固定し、壁のような棚(in-a)に見せている(Fig.7)。近代芸術蒐集家ラウル・ラ＝ロッシュのヴィラ(1923)のギャラリーの棚の配置も同様である。この部屋はル・コルビュジエの絵画を含めピュリスム絵画の展示の場所であり、壁を展示面として利用しなければならない^{注35)}。

以上のように、ヴィラ・シュウォブ(1916)以後、個人住宅の建設事業に端を発し、棚を壁から自立させ(dis)、あるいは壁に垂直に寄せること(app)、あるいは壁に見せかけること(in-a)によって、様式家具を壁に寄せて配置するという室内装飾芸術とは異なる方法が萌芽的に研究されている。

4-2 壁から自立する手法の拡張

レスブリ・ヌーヴォー館(1925)には棚(in)が展示されなかったように、様々な条件(主として施主の要求、敷地条件、部屋の性格)が課せられる1920年代から30年代の数多くの住宅構想において最も多くの適用が試みられるのは棚(dis)の可能性であり、以後も晩年まで継続的に研究されていく。

レスブリ・ヌーヴォー館(1925)における内部空間の間仕切り壁としての棚(dis)を特殊な解が要求される個別の住宅建設事業に純粋に適用することは難しい。唯一の事例は、ギエット住宅(1927)である。前衛画家であった施主のために、ル・コルビュジエはほとんどすべての棚を壁からは自立して設置しようと試みている。細長い敷地条件のために一部は壁に寄せて置いているが、書斎や婦人室などに天井まで届かない棚(dis-1)によって空間の開放性と分節を両立させている^{注36)}。

レスブリ・ヌーヴォー館(1925)と同時期に事業が開始されたヴィラ・プラネスク(1927)においても、レスブリ・ヌーヴォー館(1925)における棚(dis-1)と同じ手法の適用を検討している。墓石彫刻家の施主は、水回りの収納に至るまで細かな注文を出しているが^{注37)}、

ル・コルビュジェは間仕切り壁を兼ねる棚を壁に寄せて天井まで設置して棚 (dis-2) とし、諸室と分けている。また居間と寝室も同様の手法で、書籍の棚 (dis-2) を天井まで積みあげることによって間仕切り壁としている^{注38)}。レスプリ・ヌーヴォー館 (1925) の棚 (dis-1) における諸室の視覚的連続性を断念し、個々の諸室の独立性を優先する棚の手法は、ヴィラ・クック (1927)、ヴィラ・スタイン＝ド・モンズィ (1927) など、1920 年代の多くの住宅構想においても検討され、採用されている^{注39)}。棚はもはや「家具」ではなく、内部空間を分節する一つの間仕切り壁となっていると言える。

後にル・コルビュジェは、ヴィラ・スタイン＝ド・モンズィ (1927) を買い取った新しい施主に対して、次のような内部空間の維持を求めている。

「この住宅は外観、内部の配置、そして家具が一つとなった完全たる統一体と表現するように意図しました。この点が肝要であること、ご配慮下さい。力説しておきたいと思います。ご希望に応じて内部に手を入れていただいて結構ですが、全体のレスプリの範囲内。これこそが本当に肝要です。」^{注40)}

ル・コルビュジェが個人住宅において意図したことは明快である。壁と間仕切り壁としての棚 (dis-2) とを等価にし、そこに自由に配置された机や椅子に近代的素材である鋼管を用いることによって内部空間に「統一体」をつくりだすことであった。

Fig.8 Perspective drawing of the Residence-Atelier, Porte Molitor (1933) by Charlotte Perriand^{注41)}

さらに、壁から自立して空間を分節する棚 (dis) の手法は自在に拡張されていく。

北アフリカのヴィラ・ベゾー (1928) は、スラブと柱の構成を単純化するために、外壁を後退させたり少なくしたりしてテラスとするために、棚はより自立的になっている。ベゾー夫人の要求に応じて、内装の一部を変更しても、外観は変わらないというわけである^{注42)}。ヴィラ・サヴォワ (1931) も同様である。ピロティに押し上げられた矩形の主階は、水平横長窓が外壁の四周囲にめぐられ、夫人の要望に臨機応変に答えて、そのスラブと柱のスケルトンのなかに棚が壁に寄せて (app)、あるいは壁から自立して (dis) (間仕切り壁に寄せるかたちで) 配置されている^{注43)}。ポルト・モリートルの共同住宅の最上階の自らの自邸 (1933) においても、アトリエ以外の住居部分は「ル・コルビュジェ夫人の好みで」つくられている^{注44)}。様々な組み合わせの標準棚 (dis) が諸室を分割する機能を持ち、可動の扉兼棚も考案されている (Fig. 8)^{注45)}。

自立した標準棚 (dis) は、施主の要望を充足するだけではなく、ヴィラ・ベゾー (1928) のような遠隔地での施工を保証する^{注46)}。アルゼンチンのヴィラ・マルチネス・デ・ホズ (1930) の構想にお

いては、寝室と居間が、高さを抑えた棚 (dis-1) によって分節され、サロン・ドートンヌの展示 (1929) を応用して、施主の要望を反映した標準棚によって内部空間を構成しようとしている^{注47)}。ヴィラ・マルチネス・デ・ホズ (1930) 以降も同じ棚 (dis-1) の形式である。トゥーロン郊外のド・マンドロ夫人のヴィラ (1931)、チリのエラズリス住宅 (1930) レ・マットの住宅 (1935) は地元の建材と職人によるルシュール住宅 (1929) の応用として構想され、施主の要望を反映した標準棚 (dis-1) が図面のなかに正確に配置され、変更の余地のない空間を構成する^{注48)}。

カブ＝マルタンのル・コルビュジェの別荘、カバノン (1952) もまた建材の量産化、集合住宅建設のための一つの「実験」^{注49)} であり、「プロトタイプ」^{注50)} である。ル・コルビュジェが考案したモジュール寸法に則って躯体と棚・机・寝台などが統一されている^{注51)}、壁と一体化した窓下の机以外、すべての棚は車輪付きの棚 (dis) であり、壁に寄せられたり、あるいは一体化しているように見えても、可動である^{注52)}。ル・コルビュジェがカバノン (1952) を「装備された細胞」^{注53)} と呼ぶのは、この意味においてである。

そしてル・コルビュジェの最後の住宅構想となったル・コルビュジェ・センター (1964) もまた、鉄骨造の傘屋根構造のスケルトンに自立した家具が挿入される^{注54)}。アトリエの所員に、ル・コルビュジェは次のような指示を出している。

「私の留守のあいだに、チューリッヒホルンにおいて、さらに後に、私たちのすべての住まいの建築物において試みることのできる棚の検討に着手するように頼みました。

1925 年、ご存じレスプリ・ヌーヴォー館に私は多大なる努力を注ぎました。1929 年には、サロン・ドートンヌ。その後、フランス占領 (構想は盗まれてしまいました)。

こうしたアイディアを再考して確実なものとしてもらいたい。工業 (可塑的な素材) との新しい関係によって実現に辿り着けるかもしれないからです。そういうわけで頼んだのであって問題をはじめからやり直すためではありません。あなたたちのアイディアも大いに結構、しかし、この問題に関して、今日かたちになっているものに私は自分の研究の少なからずの時間を費やしてきたのです。」^{注55)}

ル・コルビュジェが「問題」としているのは、工業化された建築物同様、工業によって規格化された標準棚 (dis) である。しかしながら、レスプリ・ヌーヴォー館 (1925) において様々な壁との関係性の可能性についてはじめて言及されたにもかかわらず、部分的には実現しつつも、大量生産には至らなかった^{注56)}。それでもル・コルビュジェは、その可能性をあくまで追求する。こうしてたどり着いた結論は、カバノン (1952) にも認められた「取り外しできる棚」^{注57)} である。すなわち、ル・コルビュジェの棚の研究は、様々な室内空間の装備の棚の実践によって、可動の可能性を含みつつ、壁からの自立 (dis) という点において純化していく。

4-3 壁としての棚の展開

こうして、壁から自立する棚 (dis) の設置の手法が展開していく一方で、以前から棚を床から天井まで積みあげて壁のように見せる棚 (in-a) を試みていたものの、レスプリ・ヌーヴォー館 (1925) では例証されなかった棚の配置方法、すなわち壁に組み込まれる棚 (in-p) の方法が、個別の住宅建設事業で断続的に研究されている。

この研究の動機は、1920年代初期のアトリエの棚だけではなく、おそらく女性のための棚の問題を端緒としている。ヴィラ・メイエル(1925)の構想である。財政的な問題で建設は実現しなかったが、ル・コルビュジエと施主の打ち合わせはおもにメイエル夫人が主導している。実際、婦人室 *boudoir* や寝室には自立もしくは壁に寄せた棚 (*dis, app*) が空間を分節する仕掛けとして多用されている^{注58)}。さらに、シトロアン住宅 (1920) における水平横長窓の腰壁と一体化した棚 (*in-a*) が、夫人の化粧台として適用されている (Fig. 9 右上)^{注59)}。

Fig.9 Perspective drawing of the Villa Meyer (1925) 注60)

さらに壁全面を棚で覆っているのが、改修工事であるヴィラ・チャーチ (1929) の書斎の棚 (*in-a*) である^{注61)} (Fig. 3)。既存の躯体をアルミ板による引き戸棚で覆い壁と一体化させている。当時アルミ板は大変高価であったが、ル・コルビュジエはチャーチ氏の信託業者にこの「大きな壁 *ce grand mur*」の意義を次のように説明している。

1° 重さを考えると引き戸です^{注62)}。

2° 次に私たちのやり方ではいかなる塗装もいたしません。さらにすべてアルミニウムとしたこの書斎の大きな壁はすばらしい効果をもたらすと思っています。私たちの装飾では唯一豪華です。」^{注63)}

Fig.10 Perspective drawing of the Jaoul Houses (1953) 注64)

一方、1930年頃から、シトロアン型の陸屋根ではなく、モノル型と呼ばれるヴォールト屋根が断続的に検討されるようになる^{注65)}。

ヴォールト屋根が架かる週末住宅 (ヘンフェル住宅) (1935) においては、ヴィラ・チャーチ (1929) の書斎の棚 (*in-a*) のように壁を塞いでしまうことなく、石積の壁に埋め込むようにして棚を構成している^{注66)}。ヒューター博士住宅 (1950) もまた週末住宅 (ヘンフェル住宅) (1935) と同じ形式の空間構成であるが、棚が煉瓦の壁自体と一体化してくる (*in-p*)^{注67)}。ル・コルビュジエによれば、それによって「建設は単純かつ容易」^{注68)}、さらに「自然煉瓦のざらつき」^{注69)} を表現できるからである。

ジャウル住宅 (1953) においては、空間を「分節する家具」^{注70)} が

壁と平行もしくは直角方向に構成され^{注71)}、一部は壁と完全に一体化している (*in-p*) (Fig. 10)^{注72)}。ル・コルビュジエによれば、内部空間の躯体と装備は $3.66\text{m} \times 3.66\text{m}$ のモデュロール寸法に則ることによって、「自由な空間」^{注73)} が得られるのであり、一定の寸法体系を典拠として、壁／棚の二元論が統合されている。

さらにこの棚 (*in-p*) の形式は、インドのアーメダバードにおける住宅建設でも適用されている。ヴィラ・サラバイ (1955) の構想においては、はじめから自立する棚は検討されずに、並列する筒状のヴォールト空間の壁面に棚を埋め込む検討がなされている^{注74)}。それは明確にジャウル住宅 (1953) における棚 (*in-p*) の装備の可能性を追求したものであるが^{注75)}、同時にインドの伝統的な住まいの形式、すなわち換気を旨として家具を減らして通風を確保し、寝台を中心とした住居として適応させるためのものでもある^{注76)}。したがって、「家具」と言えるものは、もはやかつての棚・机・椅子の分類によるものではなく、椅子よりも床面に近い寝台のみとなる^{注77)}。こうしてル・コルビュジエは、この新しい「壁」の探求をさらに推し進め、ヴィラ・サラバイ (1955) の「壁」に写真壁画さえ構想するのである^{注78)}。実際、この住宅を訪れたル・コルビュジエの印象によると、サラバイ夫人が所有する、棚＝壁に収まらない芸術作品や骨董家具は「住宅の環境、雰囲気、精神を殺す」^{注79)} ことになりかねない。

モノル型のヴォールト屋根の住宅において、棚 (*in-p*) が壁に組み込まれていくのに関連して、同じくアーメダバードの住宅として構想された陸屋根のシトロアン型のチマンバイ住宅 (1952) やその構想を引き継いだヴィラ・ショーダン (1956) においても、カバノン (1952) における装備の自立性や可動性とは異なる躯体との一体化が追求されている^{注80)}。やはりインド固有の寝台生活と関わりがあり^{注81)}、モノル型住宅のような重厚な壁は存在しないが、ヴィラ・ベゾー (1928) とは異なり、柱間を塞ぐ壁や間仕切り壁に棚 (*in-p*) が組み込まれている。こうしてル・コルビュジエは、所謂「近代的な様式」や豪華な素材を使うこと戒め、伝統的な生活を尊重しながら、「単純性」^{注82)} を追求する^{注83)}。

ル・コルビュジエはヴィラ・ショーダン (1956) を「避難所」と呼んで回想している。

「ショーダンに何を与えたのか？ 宮殿である＝機能的な住宅である。ショーダンの財産と打ち放しコンクリートと色彩を使って、私が与えたもの：夏の日陰、冬の太陽、年中の冷気の循環。まっとうな部屋がある。各々の部屋＝避難所＝小さな家がある。1階の小さな部屋を出て2階のテラスへ。そこは日陰であり避難所である。空気は常に循環する。屋根に登って寝る。主人や来客はどこでも避難所にいて、魅了され、満足している。ローールの城であろうか？ そう、知的な王子様」^{注84)}

棚 (*in-p*) が壁面となったヴィラ・ショーダン (1956) に繰り広げられる生活は、最小限かつ根本的な「避難所」としての住まいである。そこは「城」でありながら豪華なものは何もなく、自然と同調する自由な活動があり、それを阻害する家具や器機はない^{注85)}。カバノン (1952) における「装備された細胞」とは異なる生活空間像である。

Table 2 Development of spatial composition of cabinets by Le Corbusier 注86)

until the Pavilion L'Esprit Nouveau (1925)			Decorative Arts in France				
the villas after 1925							
the villas from the 1940's							

- et Cie, Paris, 1926 (in French)
- 13) Le Corbusier: Complete Works, vols.8, Girsberger, Zürich, 1929-1970 (in French)
- 14) Le Corbusier: Precision on the Present State of Architecture and City Planning, G. Crès et Cie, Paris, 1930 (in French)
- 15) Le Corbusier: The Modulor, Les Éditions de L'Architecture d'Aujourd'hui, 1950 (in French)
- 16) Le Corbusier: Modulor 2, Les Éditions de L'Architecture d'Aujourd'hui, Paris, 1955 (in French)
- 17) Le Corbusier: Le Corbusier Sketchbooks, Vols.4, Fondation Le Corbusier, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1981, 1982 (in French)
- 18) Le Corbusier-Saunier: Toward a New Architecture, G. Crès et Cie, Paris, 1923 (in French)
- 19) Le Corbusier: Tapisseries Muralnomad, *Zodiac*, n°7, 1960 (in French)
- 20) Lucan, J., dir.: Le Corbusier an Encyclopaedia, Les Éditions du Centre Pompidou/CCI, Paris, 1987 (in French)
- 21) Mizuno, Y.: Wall and Mur, International Research, No.4, pp.209-231, 1987.6. (in Japanese)
- 22) Perriand, C.: A Life of Creation, Éditions Odile Jacob, Paris, 1998 (in French)
- 23) Rüegg, A.: Le Corbusier, Interior Furniture 1905-1965, Verlag Scheidegger & Spiess, Zurich, 2012 (in French)
- 24) Samuel, S.: Le Corbusier in Detail, Architectural Press, Oxford, 2007
- 25) Sendai, S.: Formation of the Notion on "Equipment" by Le Corbusier, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), No.739, pp.2411-2419, 2017.9. (in Japanese)
- 26) Troy, N.: Modernism and the Decorative Arts in France, Yale University Press, New Haven and London, 1991

注

*引用はすべて原文のまま。但し、[] は筆者による補注。

- 注1) たとえば、20 世紀前半の「装飾芸術 art décoratif」は単に付加的要素ではなく、家具、食器、壁紙、タペストリー、家具、照明機器、場合によっては服飾なども含む包括的な概念として「装飾」と捉えることができ、装飾否定としての近代という図式を再考する必要がある。cf., Nancy Troy, *Modernism and the Decorative Arts in France*, Yale University Press, New Haven and London, 1991.
- 注2) 千代章一郎、「ル・コルビュジェにおける「装備」概念の変容」、日本建築学会計画系論文集、第 82 巻、第 739 号、2017 年 9 月、pp.2411-2419 参照。
- 注3) 室内空間の「装備」は、ル・コルビュジェの場合、オフィスやミュージアムなど、住宅という建築類型に限らない。しかし「装備」の出自は、日常生活への問いと根本的に関連しているために、本稿ではとくに住宅の最小単位である個人住宅に焦点を絞っている。ル・コルビュジェの場合、ブルジョワの郊外週末住宅、芸術家のアトリエ住宅、芸術愛好家の住宅、婦人の住宅、自邸が住宅における「装備」の中心課題を構成している。量産住宅については、個人住宅と明らかに関連性が認められる場合には注記するが、ル・コルビュジェの場合、個人住宅の研究に着想を得て量産住宅に一般化していることから、本稿では主題的に扱っていない。
- 注4) « casiers standards ». cf., Le Corbusier, *Almanach d'architecture moderne*, Les Éditions G. Crès et Cie, Paris, 1926, p.113.
- 注5) 本稿においては、空間論という観点から、棚そのもののデザインの特徴や様式の問題については言及していない。
- 注6) 図面がなく竣工時には実現している室内装備の事例も存在し、竣工時の写真などから実現した住宅作品の装備の実態を検証する作業も必要であるが、本稿では、建築家の構想過程を主題とすることから、図面上の検討そのものを分析の対象としている。
- 注7) 代表的な研究としては、以下である。cf., Flora Samuel, *Le Corbusier in Detail*, Architectural Press, Oxford, 2007; Arthur Rüegg, *Le Corbusier, Meubles Intérieurs 1905-1965*, Verlag Scheidegger & Spiess, Zurich, 2012; Cléo Pitiot, « Le Corbusier, le mobilier corps et âme », sous la direction d'Olivier Cinqualbre et Frédéric Migayrou, *Le Corbusier*,

mesures de l'homme, Éditions du Centre Pompidou, Paris, 2015, pp.85-89.

- 注8) « Établis en série, ces casiers standards juxtaposables suivant de multiples combinaisons, pourront être vendus au Bazar de l'Hôtel-de-Ville ou à l'Avenue des Champs-Élysées ; ils se mettent contre le mur à toute hauteur, ou constituent le mur. » (Le Corbusier, *Almanach d'architecture moderne*, op.cit., p.113)
- 注9) 出典 : Le Corbusier, *Almanach d'architecture moderne*, Les Éditions G. Crès et Cie, Paris, 1926, p109.
- 注10) « L'un disposera les casiers contre les murs de ses chambres ou constituera avec eux des cloisons nouvelles à pleine hauteur ou à mi-hauteur (voir Pavillon de l'Esprit Nouveau, 1925) ; l'autre construira ses murs en incorporant les casiers dans les maçonneries. » (Le Corbusier, *Précision sur un état présent de l'architecture et de l'urbanisme*, G. Crès et Cie, Paris, 1930, p.108, p.115)
- 注11) cf., Le Corbusier et Pierre Jeanneret, *Œuvre complète 1910-1929*, Girsberger, Zürich, 1929, p.100.
- 注12) 出典 : AFLC, F1-3-78; AFC, L1-20-15. 写真手前の棚は、奥に見える台所を隔離するために天井まで到達する棚を壁から離して「置く」。台所の奥に見える天井まで到達する棚は壁に「組み込む」ように見えるが、実際には壁に「寄せる」。
- 注13) 出典 : Le Corbusier, *Précision sur un état présent de l'architecture et de l'urbanisme*, G. Crès et Cie, Paris, 1930, p.117; AFLC, Archives Villa Church.
- 注14) « La réduction du mobilier à l'état de casiers constituent à l'occasion le mur lui-même peut être obtenue aussi par des méthodes rudimentaires de construction en ciment armé :
- Je dessine le plafond et le plancher d'un étage : je divise la hauteur en quatre secteurs par exemple, au moyen de trois planchers de béton armé, épaisses de quelques centimètres, allant d'un mur à l'autre ou s'arrêtant à mi-parcours. Je maçonne tantôt sur un bord de mes planches de béton, tantôt sur l'autre, suivant les besoins. ... Voici de magnifiques parois-casiers dans lesquelles s'inséreront les « équipement intérieurs » dont j'ai parlé déjà (106). » (Le Corbusier, *Précision*, op.cit., p.108, pp.115-116)
- 注15) ル・コルビュジェが「壁 mur」「間仕切り壁 cloison」「内壁 paroi」を厳密に使い分けているかどうかは定かではない。語源的には、躯体構造を支持する耐力「壁 mur」とその内部を仕切る「間仕切り壁 cloison」、そしてそれらとは別に内壁そのものを意味する「内壁 paroi」があり、このニュアンスが現在の用語法にも影響を与えている。水野豊、「<壁>と<Mur>」、国際研究、No.4、1987.6.、pp.209-231 参照。
- 注16) 『プレジジョン』(1930)において、ル・コルビュジェが棚を壁に「組み込むこと」について言及しているもう一つの実作品は、モスクワの軽工業省「ツェントロソユーズ」(1929)であるが、やはり側壁は外壁に接しているという点において、ヴィラ・チャーチ (1929) と共通した修辞法を用いている。cf., Le Corbusier, *Précision*, op.cit., p.116.
- 注17) 出典 : Le Corbusier, *Précision sur un état présent de l'architecture et de l'urbanisme*, G. Crès et Cie, Paris, 1930, p.110.
- 注18) « Je dessine en plan et coupe un dispositif moderne : fenêtre, cloisons et casiers. J'ai gagné une place considérable; on peut circuler à l'aise; les gestes seront rapides et exacts; le rangement automatique. *Ce sont des minutes gagnées, chaque jour*, précieuses minutes (99.) » (Le Corbusier, *Précision*, op.cit., pp.109-110)
- 注19) cf., [Le Corbusier], FLC20705; [Le Corbusier], FLC20707A. この腰壁＝棚の空間図式は図面で確認される限りシトロアン住宅 (1920) が初出であり、後の 1920 年代の住宅構想においてしばしば用いられるが、ヴィラ・ラ・ロッシュ (1923) の書斎や隣接するヴィラ・ジャンヌレ (1923) の居間などが初期の事例である。しかしレマン湖畔の両親の家 (1923) は典型的な水平横長窓を有する住宅であるにもかかわらず、窓下には棚は設置されていない。固定されているのは机のみであり、ル・コルビュジェは、この窓／机の関係につねに執着している。cf., Le Corbusier, *Le Corbusier Carnets 3 1954-1957*, Fondation Le Corbusier, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1981, p.1053, 1957.11.3. 窓／机はカパノン (1952) にも認められ

る空間図式であるが、明らかに 1911 年の東方への旅で訪れた僧院や農家の風景に起源をもっている。cf., Le Corbusier, *Le voyage d'orient*, Les Éditions Forces vives, Paris, 1966, pp.20-21.

注20) フランシス・ジュルダンの家具などは、壁面との一体化の最初の試みの一つであるが (cf., Arthur Rüegg, *op.cit.*, pp.58-59)、少なくともル・コルビュジェの『装飾芸術』(1925) において批判される「装飾芸術」は壁に寄せて置くことのできる家具である。cf., Le Corbusier, *L'art décoratif d'aujourd'hui*, G. Crès et Cie, Paris, 1925, pp.146-164.

注21) 出典：筆者作成。図面において検討が確認される棚のリストであり、図面化を経ずに建設された例もあるために、実態とは必ずしも一致しない。なお、竣工時の年代へ表示しているが、本表のリストの年代は、ル・コルビュジェ財団目録にしたがって図面による検討がはじまる時期としている。

注22) cf., AFLC, CARNET25-6440~6465; [Le Corbusier], FLC6462.

注23) cf., Juline Caron, « Une villa de Le Corbusier 1916 », *L'Esprit Nouveau*, N°6, 1921.3, pp.679-704.

注24) cf., AFLC, lettre de Charles-Édouard Jeanneret à Mme Schwob, R3-3-192, 1923.10.28.

注25) 「装飾芸術」の近代化運動の萌芽はすでに存在していたが、1925 年にパリで開催された近代装飾芸術・工業芸術国際博覧会は、ル・コルビュジェを含む様々な運動のなかで「装飾芸術」の大きな転換期となったとされる。天野知香、『装飾／芸術-19 世紀フランスにおける「芸術」の位相』、ブリュッケ、2001 参照。

注26) cf., [Le Corbusier], FLC6462. もちろん、「装飾芸術」を超える試みが断片的には行われていた。すでにドミノ・システムによる住居の構想では、棚は量産で作り付けるとしている。cf., Le Corbusier-Saunier, *Vers une architecture*, G. Crès et Cie, Paris, 1923, p.197.

注27) 出典：[Le Corbusier], FLC30281.

注28) cf., [Le Corbusier], FLC30281.

注29) cf., Le Corbusier-Saunier, *op.cit.*, p.204. 直後に構想された「モノル型住宅」と呼ばれるヴォールト屋根の量産住宅においても、天井にまで達しない棚が壁に対して直角に置かれ、空間を緩やかに仕切っている。cf., *Ibid.*, p.205.

注30) ただし、ランブイエの週末住宅 (1923) の場合、構想の過程で壁から離していた棚が壁へ寄せて置くように配置を変更している。cf., FLC30071; [Le Corbusier], FLC30069.

注31) 出典：[Le Corbusier], FLC9316, 1921.9.25.

注32) 比較的高さを抑えた壁寄せの棚の方法は、集合住宅イムーヴル・ヴィラ (1922) の住戸にも適用されることになる。cf., Le Corbusier-Saunier, *Vers une architecture*, G. Crès et Cie, Paris, 1923, p.208.

注33) 出典：FLC7837.

注34) cf., AFLC, H1-17-18, lette de Pierre Jeanneret à Amédée Ozenfant, 1925.6.5; AFLC, H1-1-27, lettre de Jacques Lipchitz à Charles-Édouard Jeanneret, 1924.3.21.

注35) cf., AFLC, P5-1-208, lettre de Charles-Édouard Jeanneret à Amédée Ozenfant, 1925.4.16. ただし、構想の初期段階では自立した棚がギャラリーの中央部に設置されているが、最終的には斜路下に組み込まれている。1928 年の改修時には、スライド式の棚に変更されている。cf., [Le Corbusier], FLC15294D; FLC15205; [Charlotte Perriand], FLC15290.

注36) cf., [Le Corbusier], FLC8594A, 1926.2.28. 同じような細長い敷地のカネール住宅 (1929) も同じ棚の配置である。cf., FLC8519; FLC8535.

注37) cf., FLC8973.

注38) cf., FLC8902, 1926.5.28; FLC9238.

注39) ヴィラ・クック (1927) の棚の検討については、cf., [Le Corbusier], FLC8588; FLC8349; FLC8309. スタイン＝ド・モンズィ (1927) の棚の検討については、cf., FLC10494. いずれも、台所と居間の空間を分節する棚であり、詳細な見積りも文書も残されている。cf., AFLC, H1-6-200, Devis des travaux de menuiserie, reçu. 1926.11.23. また、個別の住宅建設ではないが、実験住宅の実現であるヴァイゼンホフ・ジートルングの 2 つの住宅 (1927) の 2 戸建て住宅 (C2) における台所・居間・寝室の分節も同様の天井まで接する自立棚である。

« Je reçois v. amicale lettre du 8^o. Je trouve très heureuse votre idée de meubler les 2 maisons comme si elles étaient habitées. Mon opinion sur le genre de meuble? Cela m'est tout à fait égal, avec cette réserve que le mobilier ne doit comprendre que des tables et des sièges, et pas de

buffets ou armoires, presque tout le nécessaire existe pour chaque pièce : les sièges peuvent être très différents les uns des autres, pour le travail, pour le repos, la lecture, la conversation etc. Les tables pourraient être standart et juxtaposable faisant ainsi de petites ou de grandes tables. » (cf., AFLC, H1-11-220, lettre de Le Corbusier à A. G. Schmeck, 1928.2.10)

「10 月 8 日のご丁寧な手紙を拝受しました。2 戸の住宅が住まわれることになったら備え付ける家具についての考え方はとても優れていると思います。家具というものについての私の意見ですか？まったくもって[建物と]同じことです。家具とは机と椅子だけで、食器棚や洋服棚はありません。それらの机と椅子を部屋に応じて必要なものを備えておけばよいのです：椅子は仕事、休息、読書、おしゃべりなどによって異なります。机は規格化し、大小を組み合わせで並べればよろしい。」

注40) « Cette maison a été conçue pour présenter une unité complète de l'extérieur, de la disposition intérieure et le mobilier devrait être faite à l'unisson. Vous vous rendrez compte que c'est là un point capital. J'insiste beaucoup sur ce point que nous aimerions vous aménager l'intérieur conformément à vous désirs, mais dans l'esprit général de l'ensemble. C'est véritablement une espèce de nécessité. » (AFLC, H1-4-111, lettre de Le Corbusier à M. Steen, 1935.10.4)

注41) 出典：[Charlotte Perriand], FLC13553.

注42) cf., FLC8488; AFLC, H1-10-31, lettre de Pierre Jeanneret à Madame Baizeau, 1929.6.5.

注43) cf., AFLC, H1-12-66, lettre de Pierre Jeanneret à Madame Savoye, 1929.8.24.

注44) cf., AFLC, H2-1-430, Document état locatif, s.d.

注 45) cf., [Charlotte Perriand], FLC13352; [Charlotte Perriand], FLC13553; FLC13450; FLC13872.

注46) 遠隔地における建設の問題が、ルシュール住宅 (1929) の乾式工法の量産住宅研究に結びついている。これはパサックのフルージュス近代地区 (1924) における工場生産研究に起因する最小限住宅 (1926) の延長線上にあるが、様々なヴァリエーションの検討のなかで、水回りがユニット化して独立し、棚が自立して空間を分割している。cf., FLC18240.

注47) cf., AFLC, I1-17-23, lettre de Le Corbuseir à Julien Martinez, 1930.12.3; [Le Corbusier], FLC24131; [Charlotte Perriand], FLC24126.

注48) cf., AFLC, H3-2-8, lettre de Le Corbusier à Madame Hélène de Mandrot, 1931.12.6. アルゼンチンのヴィラ・クルチェット (1949) は鉄筋コンクリート構造であるが、通風の確保のために壁ではなくカーテンにより遮光し、やはりドミノのスケルトンに自立する棚を厳密に位置づけている。cf., AFLC, I2-7-113, lettre de Le Corbusier à Germaine Curatelle-Manes, 19854.1.14.

注49) cf., AFLC, M2-9-66, lettre de Le Corbusier à Robert Rebutato, 1950.5.4.

注50) cf., AFLC, M2-9-82, lettre de Le Corbusier à Jeanne Veret, 1952.12.37.

注51) cf., Le Corbusier, *Modulor 2*, Les Éditions de L'Architecture d'Aujourd'hui, Paris, 1955, pp.253-255.

注52) cf., FLC24335; FLC24340. 机だけが壁に固定されているのは、おそらくル・コルビュジェがカパノン (1952) 建設地近くで発見して参照した農家の研究と関係している。その農家には家具は描かれず、正方形の窓の下に机が備えてあるだけである。cf., AFLC, Album Nivola, W1-8-110, 1951.8.12.

注53) cf., « la cellule équipée », cf., Le Corbusier, *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, Fondation Le Corbusier, Paris, The Architectural History Foundation, New York, Éditions Herscher / Dessain et Tolra, Paris, 1982, p.1010, 1963.7.23.

注54) cf., Le Corbusier, FLC21078, 1961.12.12; Le Corbusier, FLC21079, 1961.12.12; Le Corbusier, FLC21081, 1961.12.12.

注55) « Je vous ai demandé de mettre à l'étude, pendant mon absence, les casiers dont l'expérimentation pourrait se faire à Zurichhorn et, plus tard, dans tous nos bâtiments d'habitation. J'ai consacré des efforts très grands, en 1925, au Pavillon de l'Esprit Nouveau que vous connaissez ; en 1929, au Salon d'Automne ; plus tard, pendant l'Occupation (les plans ont été volés).

Je vous demande de reprendre ces idées et de les mettre au point définitivement car les nouveaux contacts avec les industriels (matière plastique) permettent d'envisager un début de réalisation. C'est cela que je vous ai demandé et non pas de recommencer le problème entièrement. Je ne vous interdis nullement d'avoir vos idées, mais, dans ce problème, je tiens à ce que l'on réalise aujourd'hui les choses auxquelles j'ai consacré une part importante de mes recherches. » (AFLC, F1-3-316, Note à l'attention de l'Atelier, 1962.4.3)

注56) cf., Charlotte Perriand, *Une vie de création*, Éditions Odile Jacob, Paris, 1998, p.250.

注57) « casiers amoviles », cf., AFLC, F1-3-245, lettre de Le Corbusier à Ignacio Pivovano, 1950.6.2.

注58) ル・コルビュジェはメイエル夫人とは面会して詳細な打ち合わせを行っているはずであるが、残された文書は工事見積りに関するものが大半である。

注59) cf., [Le Corbusier], FLC31514; FLC10370, 1926.4.21. 実質的にはル・コルビュジェの兄の妻ロティ・ラーフのためのヴィラ・ジャンヌレ(1923)の居間などもまた、同じ水平横長窓と棚の構成である。

注60) 出典 : [Le Corbusier], FLC31514.

注61) cf. FLC31463; FLC31464; FLC8190 改修のためか、この素描を正確に反映する平面図や断面図は残されていない。バイステギのアパルトマンの改修(1931)における図書室の棚についても同じ手法が適用されている。cf., FLC17499; FLC17431, 1929.6.3.

注62) 引き戸の棚は、開き戸や引き出し戸に比べると、比較的遅い時に採用されている。初出はアトリエ・ルコルビュにペリアンが入所した時期、1928年のヴィラ・ラ・ロッシュの改修によるギャラリーの棚の頃からであり、1927年よりアトリエに入手したシャルロット・ペリアンによる寄与が大きい(cf., Charlotte Perriand, *op.cit.*, p.23, p.60.)。また同時期にアトリエに在籍した前川國男の影響という推測もあるが(cf., Jacques Barsac, *Charlotte Perriand, Complete Works, Volume 1 1903-1940*, Scheidegger & Spiess, Zurich, 2014, p.122)、典拠は定かではない。

注63) « 1° Les coulissants seront plus facile à manier à cause du poids. 2° Nous avons de suite une manière propre sur laquelle nous n'aurons aucune peinture à faire, en plus de cela nous pensons que dans la bibliothèque, ce grand mur en entier en aluminium sera d'un très bon effet, ce sera le seul luxe de notre décoration. » (AFLC, H3-3-97, lettre de Le Corbusier à Moreau Lanande, 1929.1.21)

注64) 出典 : Michel, FLC10135C.

注65) モノル型住宅は芸術家の住宅(1922)に遡るが、当時はヴォールト屋根天井採光のある鉄筋コンクリート構造のアトリエの空間に最小限の自立する棚が配置されている。cf., [Le Corbusier], FLC30198.

注66) cf., [Le Corbusier], FLC9250; FLC24229; FLC9254.

注67) cf., Le Corbusier, FLC18515, 1949.11.10; FLC18504, 1950.6.27; FLC18506, 1950.6.27.

注68) « la construction est si simple, si facile que votre architecte entrepreneur peut certainement la réalisation sur place. », cf., AFLC, I2-7-137, lettre de Le Corbusier à Professeur Fueter, 1949.11.14.

注69) « la rudesse des briques brutes », cf., AFLC, I2-7-141, lettre de Le Corbusier à Professeur Fueter, 1950.3.17.

注70) « meuble de séparation », cf. AFLC, J1-14-413, lettre de Le Corbusier à Charles Barberis, 1955.3.21.

注71) cf., Le Corbusier, FLC10099, 1952.3.1.

注72) cf., Michel, FLC10135C; FLC10037; FLC10169.

注73) « l'intérieur des espace libres », cf., AFLC, J1-14-396, lettre de Le Corbusier à Charles Barberis, 1955.1.4.

注74) cf., FLC31884, 1952.6.12; Véret, FLC6709, 1953.4.24.

注75) cf., AFLC, P3-7-57, lettre de Doshi à Jean-Louis Véret, 1953.9.8.

注76) cf., AFLC, P3-7-84, lettre de Tobito à Jean-Louis Véret, 1954.10.20.

注77) 実際、ル・コルビュジェは壁面の煉瓦以上に、床面の建材を研究し、伝統的な地元産の自然石材を採用している。cf., AFLC, P3-7-86, lettre de Tobito à Jean-Louis Véret, 1954.10.20; P3-5-201, lettre de Le Corbusier à Manorama Sarabhai, 1954.15.3.

注78) cf., [Le Corbusier], FLC6725; Le Corbusier, *Le Corbusier Carnets 3 1954-1957*, op.cit., p.42, 1954.2.24; AFLC, P3-5-502, Note pour Michel

dictée par L-C, 1954.3.24.

注79) « l'ambiance, l'atmosphère, l'esprit de la maison », cf., AFLC, P3-5-223, lettre de Le Corbusier à Manorama Sarabhai, 1956.5.1.

注80) cf., Doshi, FLC6357, 1954.1.17; Doshi, FLC6367, 1954.1.17; Doshi, Véret, FLC6409A, 1953.5.20, 1954.1.30; Doshi, Véret, FLC6419A, 1953.5.19, 1954.1.30.

注81) cf., AFLC, P3-5-367, lettre de Le Corbusier à Chinubhai Chimanbhai, 1954.4.26.

注82) « simplicité », cf., AFLC, P3-5-371, lettre de Le Corbusier à Chinubhai Chimanbhai, 1954.9.22.

注83) 壁と一体化する新しい「壁」の追求の一方で、ヴィラ・サラバイ(1955)やヴィラ・ショードン(1956)のアーメダバードの住宅作品の人工照明については、一貫してル・コルビュジェ制作の工業製品を装備することを検討している。cf., AFLC, P3-5-208, lettre de Jacques Michel à Manorama Sarabhai, 1953.9.8; AFLC, P3-7-109, lettre de Doshi à Jean-Louis Véret, 1953.9.8.

注84) « Qu'ai-je donné à Shodan? Un palais, = une maison fonctionnelle. Avec son argent et de du béton brut et de la couleur, je lui ai donné: l'ombre en été, le soleil en hiver, l'air circulant et frais, à toute saison. Des chambres normales chacun ayant sa chambre = son abri = sa petite maison. Il sort de la petite maison sur la 1ère, deuxième terrasse, à l'ombre, à l'abri. Dans un air mouvant permanent. Il montre sur le toit, Il y dort. Partout lui ou ses hôtes, sont à l'abri, son captivés, enchantés. C'est un Château de la Loire? Oui pour un prince intelligent » (Le Corbusier, *Le Corbusier Carnets 3 1954-1957*, op.cit., p.451, 1955.11.13)

注85) 「自然のコンディショニングの再確立」など時代錯誤、人工照明と空調があるではないか、という批判をル・コルビュジェは未来主義として斥けている。cf., Le Corbusier, *op.cit.*, p.1078, 1957.11.1.

注86) 出典 : 筆者作成。

注87) したがってその寸法体系は、内法で決められているわけではなく、ものの実用性という側面は等閑視されている。

注88) cf., Le Corbusier, « Tapisseries Muralnomad », *Zodiac*, n°7, 1960, p.57.

注89) cf., Le Corbusier et son atelier rue de Sèvres 35, W. Boesiger éd., *Œuvre complète 1952-1957*, Girsberger, Zürich, 1957, p.208.

注90) cf., Le Corbusier, *Précision*, op.cit., p.116; Le Corbusier, *L'Architecture d'Aujourd'hui*, numéro hors série, « Le Corbusier », 1946.4., p.3; Le Corbusier, *Le Corbusier Carnets 4 1957-1964*, op.cit., p.912, 1962.7. さらに遡れば、1919年の東方への旅で体験したエマの僧院の僧房における孤独と静寂の生活空間である。cf., AFLC, A3-1-324-333, « Unité d'habitation de grandeur conforme », 1957.4.1.

本稿は科学研究費助成事業基盤研究(C)(一般)課題番号15K06399の研究成果の一部である。

REALIZATION OF THE STANDARD CABINET AS THE “EQUIPMENT” BY LE CORBUSIER:

Transformation of the “Wall”

Shoichiro SENDAI^{*1}

^{*1} Assoc. Prof., Graduate school of Engineering, Hiroshima Univ., Dr.Eng.

This paper aims to clarify the spatial composition of the standard cabinets as the “equipment” by Le Corbusier (1887-1965), in order to discuss the revolution of the notion of interior “decor” in the 20th century.

At first, we pick up the discourse concerning the standard cabinets in the architectural projects for private houses, and classify them as the methodology of interior setting of a building (Chapter 2). Next, we extract the case examples of the studies of the cabinets from all Le Corbusier's private house projects, and clarify the secular change of the realization methods of the cabinets (Chapter 3). Finally, we discuss the reasons and the implications of such a transition about the spatial composition of houses (Chapter 4).

Le Corbusier has already proposed a prototype of interior life space in the occasion of the construction of the pavilion L'Esprit Nouveau in 1925. At that time, he mentioned three methods of setting the standard cabinets: to incorporate (“incorporer”) into the wall - cabinet (in) -, to put (“appuyer”) on the wall - cabinet (app) -, and to separate (“disposer”) from the wall – cabinet (dis) -. However, although he replaced the stylized furniture with a standardized mass production cabinets, he could not realize from the beginning all three types of the cabinets : cabinet (in) , cabinet (app), and cabinet (dis) .

In the private house projects from the 1920s to the 1930s, cabinet (app) was often applied due to the restrictions on site conditions and the requests of daily life from the owners. This is methodologically the same as the setting of the conventional decorative arts. However, what Le Corbusier aimed was the cabinet (dis) as partition separated from the wall to escape from the traditional furniture as the decorative arts. It was greatly affected by the opportunities of the mass-produced housing researches after the First World War and of constructions at the remote locations. That is, it was necessary for the architect to detach the cabinets from the immovable wall surface in order to automatically set up them without controlling all construction processes on the spot far from the architect. It was also partly effective to answer the details of various requests of the owners. Such a cabinet (dis) has been continuously studied after the Second World War, and finally, it was not only independent from the wall, but also it was itself being studied as movable cabinets.

On the other hand, the cabinet integrated with the wall, which could not be realized in the 1920s, was examined by houses with vault roofs. Unlike houses with pillars and floors as structural framework, Le Corbusier examined the cabinet incorporated into the wall, due to the large number of walls supporting the vault roof. Such a cabinet (in) was pursued further in India under the tropical climatic conditions, for the necessity of ventilation not obstructed by furniture.

The realization of the standard cabinets by Le Corbusier does not develop linearly, but expands to the both poles while continuing to the methodology of the decorative arts. Although this result seemingly contradicts, whether movable cabinet or incorporated cabinet, it can be thought that Le Corbusier's studies of the standard cabinet was the research of a new “wall”.

(2018年3月15日原稿受理, 2018年7月10日採用決定)